

大槌氏をめぐるナゾ
第5回

本連載第三回の、伊達勢による吉里吉里攻伐の部分の思い出して下さい。兵船数艘で来襲した伊達勢のため、火を放たれ急追されて芳賀一族は新城館に撤退してたて籠り、援軍の到着をひたすら待つばかりだったのですが、間もなく味方の人数が馳せ集まって敵を撃退することができたのです。

この味方の人数とは、まぎれもなく和賀郡から馳せ戻って来たわが大槌孫八郎だったのです。岩崎城の普請奉行を命ぜられて残留した大槌氏でしたが、修理・普請が終了したのは慶長六年九月でした。それから自らの知行所に馳せ戻り侵略者たちを追い散らしたのです。勝ち戦に勢いづく伊達勢を追い散らし得たのは、実力者でありかつその地が自らの知行所である大槌氏しか考えられないのであり、そう考えて何らの矛盾もありません。

さて前回のつづきですが、岩崎合戦参陣の際の、大槌孫八郎配下

の將兵の員数について『大槌町史』や『岩手県史』では、百六十一人説の方を採用しています。

しかし本連載第二回で記したように、天正十九年の「九戸御陣御人数積り」には部下六十人と記され、それから岩崎合戦までは九年間です。その間領有する石高も八百石のままですし、どちらかといえば筆者は六十一人説を採用の方が自然ではないかと思えます。田の浜佐々木家系図の「大槌孫八郎に従ひ、六十一人にて出陣せり」の記事もあることですし。

なお釜石狐崎城で撫で切りにされた城兵が百六十一人、九戸の乱に大槌氏の率いた部下が六十人、岩崎合戦の際の部下は六十一人説と百六十一人説。というように類似の数字が頻出して不思議ではあります。伝承の錯綜があったのかもしませんが、それは今後の検討課題としておきたいと思えます。

この六十一人説と百六十一人説のような大きなクイチャイガイが、実はこのほかにもあるのです。

ずっと後の年代のことになりますが、明治という年号の前は、いわゆる江戸時代で、これは徳川三百年ともいわれて、徳川幕府による政治が三百年間ちかくも続けた期間です。この江戸時代三百年の間に、例えば寛永とか、元禄とか、享保とか、天保とかいうよう

うに三十五ばかりの年号が並んでいるわけで、「江戸」などという年号があったわけではありません。もち論、知っている方にとってはあたり前のことですが、この事を学んだ小学生時代があまりにも遠くなくなってしまったために、忘れてしまわれたオカアサン方もおられるという現実を、最近知りました。

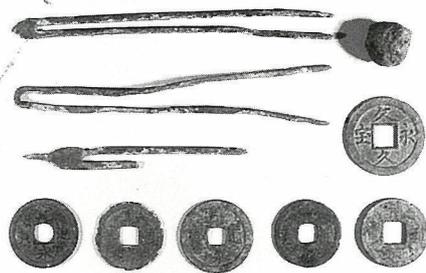
大槌孫八郎の栄えた時代は、この江戸時代三百年間のさらに前の時代でありまして、最後の城主孫八郎政貞が、南部氏によって滅ぼされたのは、ほとんど江戸時代になると同時のことでありました。

大槌氏が滅んでしましますと、南は平田村から北は豊間根村までの範囲を治めていた者がいなくなつたということであり、従って南部氏はその範囲を統率する者として、盛岡から代官を派遣することとしたのです。これが大槌代官所の始まりです。その天和三年(一六八三)という年に、豊間根村が

宮古代官所管下へ、宮古代官所管下であった小国村が大槌代官所管下へ替え地となりましたが、以後明治に至る一八五五年間、代官所を擁する大槌は、物資と文化とが集散する行政の一中心地であり続けたのでした。

代官所の場所は、現在の大槌小学校の敷地内となっています。なぜ代官所としてこの場所が選定されたのかといえ、そこは大

槌城の麓であり、大槌氏が日常を過ごした屋敷の場所だったからだろうと考えられます。大槌城は戦いのための山城であり、飲料水のこと一つを考えてもわかるように、



代官所跡出土遺物の一部

城主から家来たちまでが年々中山城生活をするとなれば大へんなはずで、日常の平穏な生活のためのお屋敷は、きっと城の近くの平地にあつたのでしよう。

明治になって、大槌代官所が廃止されたのち、その区域内に大槌町役場の設置が考えられたように、大槌代官所設置の場所として、大槌氏の屋敷跡が選ばれたとする考へ方は成り立つでしょう。

本年四月、町教育委員会により、大槌小学校々庭で代官所跡確認のための試掘調査がおこなわれました。2×5mの試掘溝を三カ所掘ってみたものの全くの予備調査ではあつたのですが、ちょうど一

間(約一・八m)間隔に並んで建物の礎石が三個発見され、県の文化課の専門家等によって、代官所もしくはその関連施設のものであることが確認されました。このことは新聞等でも報道されて、皆様すでにご承知の通りです。その他貨幣の寛永通宝や文久永宝、きせるの吸い口、鉄砲の弾、数えきれぬほどの陶器の破片などが出土しました。代官所とどう結びつつかかわりませんが、かんざしかと思われる銅製の遺物が三点あつたことにも興味を惹かれます。

そして、なお申しますならば、先ほど述べた考へ方によって、代官所遺構のさらに下層からは、わが大槌氏に関わる遺構や遺物が現出してくるという期待と可能性を、誰人も否定することができないのです。

文・町文化財保護審議会委員
花石公 夫さん

大槌の歴史「大槌氏をめぐるナゾ」を読んだのご感想やご質問、また、大槌の歴史についてを知りたいことなどお便りをお寄せください。

あて先は、役場内企画商工課「大槌の歴史」係(町内新町1番1号)まで。